The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年期における祖父母との死別に関する研究(第2報) : 死別反応とその関連要因(性格特性、故人の生前の機能)についての検討
Author(s)	中里, 和弘
Citation	生老病死の行動科学. 2006, 11, p. 21-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原著論文

青年期における祖父母との死別に関する研究（第２報）
― 死別反応とその関連要因（性格特性、故人の生前の機能）についての検討 ―

A study about grandparent's death in adolescence (2) : Bereavement reactions and its correlated factors (personality, grandparent's functions in his/her life)

（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）　中　里　和　弘

Abstract

This study, the correlations of bereavement reactions and its correlated factors (personality, grandparent's functions in his/her life) were reported. The participants of this study were 323 university students. As a result, emotionally unstable personality was found to influence the grandchildren's bereavement reactions. *Time perspectives functions* and the *acceptance of existence functions* out of four grandparents' functions in his/her life strongly influenced the grandchildren's bereavement reactions. Moreover, the influences of *time perspectives functions* and those of *acceptance of existence functions* on *sorrow and yearning* were bigger than those of other two functions. Also, the influence of *time perspectives functions on re-experience of image and thought* was bigger than those of other three functions. Consequently these findings suggested that the degree of grandchildren's bereavement reactions was depended on the four types of grandparent's functions in his/her life.

Key word : grandparent's death, bereavement reactions, personality, grandparent's functions in his/her life

Ⅰ　目　的

大切な人の死は遺された者に大きな衝撃を与えると同時に、様々な反応（死別反応）を生じさせる。しかしながら、同じ続柄の対象を亡くした場合であっても、その死別反応の現れ方や持続期間、死別からの回復の過程に関して違いが生じる（小島, 1988 ; Burnell & Burnell, 1989 ; 松井・鈴木・堀・川上, 1995 ; 小此木・深津・大野, 1998 ; Worden, 2001）。そして、これら死別後の反応などに影響を及ぼす要因として、例えば、小島（1988）は、①遺族の特性、②故人との関係性、③死別のタイプ、④死因、⑤遺族に役立つ資源、⑥その他の6つを挙げている。そこで本研究では、死別反応に影響を及ぼすと考えられる要因のうち、遺された者自身の認知に関連した要因に焦点を当てる。具体的には、小島（1988）が関連要因として挙げている①「遺族の特性」の１つでもある自己の性格に対する認知（性格特性）、②「故人との関係性」を評価する１つの指標でもある祖父母が生前に果していた機能に対する孫の認知（故人の生前の機能）の２つの認知について検討を行う。

性格特性が死別反応に影響を及ぼすことは、これまで多くの先行研究で指摘されている。例えば樋口・平山（1985）は、死別反応に親和性のある性格特性として、自己不確実性、過敏、神経質、自己を悲観する傾向、易労性、自尊心の低さ、過度の依存性、易怒性などの情緒の不

安定性を挙げており、岡村・河合（1987）や富田・大塚・伊藤・三輪・村岡・片山・川村・北村・上里（2000a, 2000b）の研究でも、死別反応と不安特性との関連が報告されている。また、大学生の対象喪失を扱った池内・中里・藤原（2000）の研究でも、情緒の不安定性と喪失感情との関連が報告されている。

故人との関係性と死別反応に関しては、故人との関係が親密なものであるほど死別反応も強いとされ（小島, 1988；Burnell & Burnell, 1989；Shaver & Tancredy, 2001）、本研究でも、第1報においてこれと符合する研究結果が得られている。そして、この故人との関係性については、故人が生前にどのような機能を担っていたかといったより深いレベルで評価することも可能であると考えられる。祖父母の果す機能や役割に関しては、これまで多くの先行研究が行われており、祖父母であることに多様な意味が見出されている（Kahana & Kahana, 1971；Kivnick, 1982；田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤, 1996）。例えば、田畑他（1996）は、祖父母の果す機能として4つの機能（存在受容機能、日常的・情緒的援助機能、時間的展望促進機能、世代継承性促進機能）を挙げ、これら4つの機能を測定する「孫－祖父母関係評価尺度（孫版）」を作成している。当然、この「孫－祖父母関係評価尺度（孫版）」は孫から見た存命中の祖父母の機能を測定するものであるが、亡くなった祖父母が生前に果していた機能を測る上でも有用な尺度となりうるのではないかと考えられる。だたし、筆者の知る限りでは、田畑他の「孫－祖父母関係評価尺度（孫版）」が実際に亡くなった祖父母の機能を評価する測度となりうるかどうかについてはこれまでのところ検討されておらず、また、祖父母が果す各機能と死別反応との関連についても十分に検討されていないように思われる。

なお、死別反応に影響を及ぼす要因のうち、小島（1988）が挙げる死因や遺族に役立つ資源といった要因は、大切な人の死といった事象をもって生じる違いでもあり、死別以前から死別後の反応に及ぼすこれらの影響について予測することは難しいと考えられる。しかしながら、死別反応と性格特性、死別反応と故人が生前に果していた機能との関連について検討を行うことは、死別以前の段階でどういった性格特性をもった者や、祖父母がどういった機能を果している場合に死別反応が強く生じるのかについて予測する上で有益な資料を提供するものと考えられる。したがって、死別反応と性格特性、死別反応と故人の生前の機能との関連を示すことは、臨床場面においてサポートを必要とする祖父母と死別した孫に介入を行う際の資料となると同時に、死別反応が生じる可能性の高い者を事前にサポートするといった予防的介入を行う上でも応用可能性を持つと考えられる。

そこで第2報では、死別反応の関連要因として、性格特性と故人の生前の機能を取り上げ、以下の2点について検討を行うことを目的とした。まず、(1)性格特性と死別反応との関連に関して、先行研究と同様、祖父母の死に伴う死別反応についても情緒の不安定性が関連しているか検討すると同時に、情緒の不安定性以外の性格特性でも死別反応と関連していないかどうかについて検討を行う。次に(2)田畑他が作成した「孫－祖父母関係性評価尺度（孫版）」を亡くなった祖父母の生前の機能を評価する尺度として用いることが可能であるのかについて検討した上で、祖父母が生前果していた各機能と死別反応の関連を調べ、故人が生前果していた機能によって死別反応に違いが生じるのかについて検討を行うことを目的とした。

Ⅱ 方 法

対象と調査方法

2004年11月、関東の大学に通う学生323名（男性105名, 女性218名：平均年齢19.7歳, SD=1.0）を対象に集合法による質問紙調査を行った。323名中、過去に祖父母を亡くしたことのある者は214名（66.3%）であり、そのうち故人の続柄について未記入であった14名を除く、男性63名、女性137名からなる計200名（平均年齢19.6歳, SD=1.1）を分析対象とした。

調査内容

(1) 死別に関する属性

最も衝撃を受けた祖父母との死別体験に関して、故人の続柄、死別からの経過時間、死別時の故人の年齢および回答者の年齢、死亡原因等について回答を求めた。

(2) 死別反応尺度

第1報において作成された祖父母の死に伴う死別反応を測定する尺度であり、「悲哀感と思慕(7項目)」と「イメージと思考の再体験（6項目)」の2因子・13項目からなる。「悲哀感と思慕」は主に情緒的反応から、「イメージと思考の再体験」は認知･認識的反応から構成されていた。

(3) 矢田部ギルフォード性格検査（以下、YG性格検査と略す）

YG検査は、ギルフォードの性格理論に基づき辻岡・矢田部・園原によって作成された自己評定式の質問紙法性格検査である。12の性格特性（各10項目、計120項目）から構成され、さらに12の性格特性は6因子（主導性・非内省性・衝動性・活動性・社会的不適応性・情緒不安定性）の上位概念にまとめられる。「主導性」は支配性・社会的外向といった性格特性、「非内省性」はのんきさ・思考的外向といった性格特性、「衝動性」は一般的活動性・のんきさといった性格特性から構成される。また、「活動性」は攻撃性・一般的活動性といった性格特性、「社会的不適応性」は客観性欠如・協調性欠如・攻撃性といった性格特性、情緒不安定性は抑うつ性・回帰性傾向・劣等感・神経質といった性格特性から構成される。各因子の得点は、因子を構成する性格特性の得点の合計得点として表される。回答は3件法（はい、どちらでもない･わからない、いいえ）からなり、6つの性格特性の得点は、それを構成する性格特性の合計得点によって評価される。本研究では、12の性格特性を6つの因子にまとめた性格特性について検討を行う。

(4) 孫ー祖父母関係評価尺度（孫版）

田畑他（1996）が作成した尺度で、孫から見た祖父母の4つの機能を測定する。4つの機能は、①存在受容機能（8項目)、②日常的・情緒的援助機能（6項目)、③時間的展望促進機能（8項目)、④ 世代継承性促進機能（4項目）である。本研究では、孫ー祖父母関係評価尺度(孫版）の項目内容を過去の記述に修正し、各項目の「祖母（祖母)」といった記述を「その人」といった記述に修正したものを用いた。回答に関しては、原版の3件法（はい・どちらでもない・いいえ）から、4件法（「そうは思わない」から「そう思う」)に変更した。

Ⅲ 結 果

1．性格特性と死別反応との関連

まずYG性格検査に関して、6つの各性格特性（主導性・非内省性・衝動性・活動性・社会的不適応性・情緒不安定性）間でピアソンの積率相関分析を行った（Table 1)。その結果、主

導性と衝動性（r=.66）、非内省性と衝動性（r=.65）、衝動性と活動性（r=.85）、社会的不適応性と情緒不安定性（r=.67）の間で高い相関が認められた。そこで以下の分析では、重回帰分析を用いて性格特性と死別反応の関連を検討する際、性格特性間で生じる多重共線性を避けるため、衝動性と社会的不適応性の２つの性格特性を説明変数から除外した。

４つの性格特性（主導性・非内省性・活動性・情緒不安定性）の各得点を説明変数に、死別反応尺度の合計得点・各因子ごとに項目得点を加算した下位尺度得点をそれぞれ基準変数とした重回帰分析を行った（Table 2）。

その結果、死別反応合計得点に関して情緒不安定性の標準偏回帰係数が正の値で有意傾向を示し、情緒が不安定な人ほど死別反応が強い傾向にあることが示された。また、死別反応尺度の下位尺度「イメージと思考の再体験」においては、活動性と情緒不安定性の2つの性格特性間で有意な標準回帰係数が示された。活動性が高く、情緒が不安定であるほど「イメージと思考の再体験」を反映した死別反応が強いと考えられる。「悲哀感と思慕」に関しては、有意な標準偏回帰係数を示す性格特性は認められなかった。ただし、各性格特性の標準回帰係数は全体的に低値であり、また、４つの性格特性の分散は、死別反応合計得点および下位尺度の分散を２％－８％しか説明しておらず、極めて低い値を示した。

Table 1　YG 性格検査の性格特性間の相関

	1	2	3	4	5
1 主導性					
2 非内省性	.41***				
3 衝動性	.66***	.65***			
4 活動性	.59***	.37***	.85***		
5 社会的不適応性	−.11	−.02	.15*	.31*	
6 情緒不安定性	−.42***	−.23**	−.23**	−.21**	.67***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

Table 2　性格特性を説明変数とした死別反応の重回帰分析結果

	死別反応合計得点	悲哀感と思慕	イメージと思考の再体験
	β	β	β
主導性	−.07	−.04	−.13
内省性	.03	.11	.02
活動性	.13	.07	.19*
情緒不安定性	.17 †	.10	.21*
R	.21 †	.15	.27*
R^2	.05	.02	.08

† p<.10 , * p<.05

２．祖父母の生前の機能と死別反応の関連

2-1　祖父母の生前の機能に関する因子構造

本研究で用いた孫－祖父母関係評価尺度（孫版）は、本来、孫から見た存命中の祖父母の機

能を測定するために作成された尺度であり、本研究のように既に亡くなっている祖父母の生前の機能を測定することを想定して作成された尺度ではない。また、本研究では元尺度と異なる回答形式を採用した。そこで、まず今回得られた祖父母の生前の機能について因子構造の検討を行った。

全26項目について、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行い、固有値・寄与率・解釈可能性に基づき総合的に判断した結果、4因子・19項目が選択された（Table 3)。第1因子と第3因子に関しては、元尺度の「日常的・情緒的援助機能」と「存在受容機能」の2つの因子項目から構成された。本研究では、各因子の項目内容に考慮し、第1因子を「日常的・情緒

Table 3　祖父母の生前の機能に関する因子分析結果（主因子法・バリマックス回転）

項目	F1	F2	F3	F4	h2
Ⅰ．日常的・情緒的援助機能（α=.91）					
12. 親には言えないことでもその人には話せることがあった	.76	.26	.26	.00	.71
19. 自分ではどうにもならなくなった時、最後に頼りになるのはその人だなあと思った	.68	.35	.28	.00	.67
17. その人は、私が悩んでいる時など、必要な時にアドバイスしてくれた	.65	.42	.26	.20	.71
11. その人は私が両親とぎくしゃくした時など、間をとりもってくれた	.64	.20	.27	.19	.56
9. 悩みやもめごとがあった時など、その人が何もしなくてもいるだけで、心の支えになると思った	.62	.46	.32	.00	.70
25. その人は両親が忙しい時など両親のかわりに、私のことをいろいろしてくれた	.62	.22	.38	.20	.61
Ⅱ．時間的展望促進機能（α=.92）					
20. その人の姿から、自分のこれからの生き方を前向きに考えることがあった	.36	.78	.25	.21	.84
13. その人の若い頃の話を聞いて自分の生き方に参考になることがあった	.30	.67	.26	.27	.68
24. 私は、将来その人のようになりたいと思うことがあった	.35	.67	.35	.13	.71
4. その人の姿から、自分が年を取ったとき、どうなりたいか想像することができた	.19	.64	.21	.16	.51
26. その人の姿から、人の一生について積極的に考えてみることがあった	.38	.57	.29	.30	.65
23. その人は、若い頃の社会の様子や暮らしについて話してくれた	.39	.52	.33	.23	.58
Ⅲ．存在受容機能（α=.92）					
22. その人は、私に興味や関心をもっていてくれていた	.20	.22	.75	.15	.67
15. その人は何があっても、私のことを見捨てないと思っていた	.40	.29	.72	.14	.78
1. その人は、私の体の具合を気づかってくれた	.28	.27	.69	.12	.64
14. その人は、私の気持ちを理解しょうとしてくれた	.42	.28	.68	.15	.74
18. その人がいるだけでなんとなく安心できる気がした	.44	.39	.58	.00	.70
Ⅳ．世代継承性促進機能（α=.79）					
21. 生前、その人の姿から、親はその人に似ているなあと実感した	.11	.22	.10	.85	.80
16. 生前、その人を見て、親や自分もなんとなく似ているなあとしみじみ思った	.21	.44	.31	.57	.66
寄与率(%)	21.16	20.26	18.31	8.22	
累積寄与率(%)		41.42	59.73	67.95	

的援助機能」、第3因子を「存在受容機能」と命名した。第2因子と第4因子に関しては項目数が異なるものの、第2因子は元尺度の「時間的展望促進機能」因子項目から、第4因子は「世代継承性促進機能」因子項目から構成された。そこで本研究では、元尺度と同様、第2因子を「時間的展望促進機能」、第4因子を「世代継承性促進機能」と命名した。

「日常的・情緒的援助機能」因子は、祖父母が孫が困った時に助けたり、祖父母が孫と親との関係を調整するなど、祖父母が日常場面・情緒的側面で孫を支えるといった祖父母の機能からなる。「時間的展望促進機能」因子は、孫が祖父母の姿から未来を展望したり、祖父母が孫に対して歴史を伝達するなど、孫が過去と未来について展望することを促進するといった祖父母の機能からなる。また、「存在受容機能」因子は、祖父母が存在すること（being）だけで孫の安心に繋がったり、孫が祖父母からの無条件の深い愛情を感じるなど、祖父母が孫の存在を受容するといった祖父母の機能を表している。「世代継承性促進機能」因子は、祖父母の姿から孫が親を含めた家族(祖父母・親・孫)の連続性を感じるなど、祖父母が孫に世代の連続性を継承するといった祖父母の機能を表している。

2-2　祖父母の生前の機能と死別反応の関連

祖父母の生前の機能と死別反応との関連を検討するため、今回得られた孫・祖父母関係評価尺度の各因子ごとに項目得点を加算した下位尺度得点を説明変数、死別反応尺度の合計得点・各因子ごとに項目得点を加算した下位尺度得点をそれぞれ基準変数とする重回帰分析を行った(Table 4)。

その結果、4つの機能のうち、「時間的展望促進機能」と「存在受容機能」の2つの機能が死別反応尺度合計得点に対して有意な正の影響を及ぼしていた。また、死別反応尺度の下位尺度に関しては、「悲哀感と思慕」において「時間的展望促進機能」と「存在受容機能」の標準偏回帰係数の値が他の2つの機能に比べて大きく、「イメージと思考の再体験」では、「時間的展望促進機能」の標準偏回帰係数の値が他の3つの機能に比べて大きい値を示した。

祖父母の生前の機能は、死別反応合計得点および下位尺度の分散の34％－56％を説明していた。死別反応尺度合計得点と「悲哀感と思慕」における分散説明率は50％を超えていた。

Table 4　祖父母の生前の機能を説明変数とした死別反応の重回帰分析結果

	合計得点	悲哀感と思慕	イメージと思考の再体験
	β	β	β
日常的・情緒的援助機能	.12	.09	.15
時間的展望促進機能	.35***	.33***	.32**
存在受容機能	.23**	.35***	.05
世代継承性促進機能	.13	.08	.16*
R	.73***	.75***	.58***
R^2	.53	.56	.34

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

Ⅳ 考 察

1．性格特性と死別反応の関連

性格特性と死別反応に関しては、情緒が不安定である人ほど、死別反応も強い傾向にあることが示された。この結果は岡村･河合（1987）や富田他（2000a, 2000b）の研究報告と符合するものであった。また、死別反応尺度の下位尺度に関しては、「イメージと思考の再体験」において情緒不安定性と活動性の影響が示された。情緒が不安定であるほど、活動性の高い人ほど、「物思いにふける」「その人のことを想像して辛い気持ちになった」といった認知・認識的反応が強く生じるものと考えられる。これは、情緒が不安定であったり、活動性が高いことによって祖父母の死に対して認知機能が活性化し、その結果として、故人や死別体験そのものに対してイメージを膨らませたり、思考を繰り返すといった反応が生じるのではないかと考えられる。一方「悲哀感と思慕」といった情緒的反応（例えば「その人がいないことに寂しさを感じた」「その人にふと会いたいと思った」）に関しては、性格特性との関連は認められなかった。

2．故人の生前の機能と死別反応の関連

故人（祖父母）の生前の機能と死別反応との関連については、田畑他の「孫ー祖父母関係評価尺度（孫版）」を用いて検討を行った。本研究で得られた因子構造は、各因子を構成する項目内容が元尺度と若干異なるものの、元尺度とほぼ同様の4因子が抽出された。したがって、祖父母の機能は死別といった事象に関わらず、比較的安定したものであり、田畑他の「孫ー祖父母関係評価尺度（孫版）」は、亡くなった祖父母の機能を評価する尺度としても応用可能であると考えられる。

本研究では、祖父母の生前の機能と死別反応との関連について、4つの機能のうち「時間的展望促進機能」と「存在受容機能」の2つの機能が死別反応に正の影響を及ぼしていた。孫から見た場合、故人がより自己の人生を熟慮されてくれた存在であったほど（時間的展望促進機能）、また、故人がより自己のことを受容してくれた存在であったほど、死別反応も強いと考えられる。なお、死別反応尺度の下位尺度「悲哀感と思慕」に関しては、「時間的展望促進機能」と「存在受容機能」の影響度が他の2つの機能より大きく、「イメージと思考の再体験」に関しては「時間的展望促進機能」の影響度が他の3つの祖父母の生前の機能よりも大きいことが示唆された。このことから、祖父母の生前の機能によって、死別後の孫に対して情緒的反応を強く生じさせたり、あるいは認知的反応を強く生じさせるなど、孫の死別反応に違いをもたらす場合があるのではないかと考えられる。例えば、祖父母が生前に果していた「時間的展望機能」とは、孫が生前から祖父母の姿や祖父母との対話を通して未来を展望し、また、祖父母の過去を間接的に回顧するといった要素を含んでいるといえる。そのため、故人の「時間的展望機能」が高いということは、それだけ孫が生前から祖父母に積極的に関わり、祖父母の姿や祖父母との対話を通して祖父母の生き方を自己の人生観に統合するなど、孫と祖父母との双方向の能動的なコミュニケーション形態が想定される。したがって、このような関係性の中で祖父母を亡くすということは、例えば「あの時、祖父母はこう言っていた」、「祖父母の人生はどうだったのだろうか」といった思いを生じさせ、結果的に「物思いにふけった」、「その人のことを想像して辛い気持ちになった」といった故人に関する「イメージと思考の再体験」を反映した反応を強く生じさせるのではないかと考えられる。

さらに「悲哀感と思慕」といった情緒的反応に関しては、この日々の双方向の能動的コミュ

ニケーションを基礎とする「時間的展望促進機能」に加え、「存在受容機能」が影響していた。孫から見た祖父母の生前の「存在受容機能」とは、Rogers（1957）の言うところの「無条件の肯定的配慮」に通じるものではないかと考える。「無条件の肯定的配慮」とは１人の人間を条件つきで認めるのではなく、その人をあるがままに受け入れ、関わり合おうとする態度である。したがって、「時間的展望促進機能」の高い関係性に加え、自己の存在をあるがままの存在として受け入れ、時に甘えさせてくれる祖父母の死は、大きな喪失感を生じさせると同時に、その人がいないといった悲哀感や寂しさを増幅させ、戻ることのない故人を恋しく思うといった故人に対する思慕の念を強く生じさせるのではないかと考えられる。

３．総合考察

本研究では、祖父母の死に伴う死別反応に対して性格特性や故人の生前の機能が関連していることが示唆された。ただし、死別反応に対する性格特性の分散説明率は２％－８％であることから、性格特性の影響力は極めて小さいといえる。一方、死別反応に対する故人の生前の機能の分散説明率は35％－57％であり、故人の生前の機能は死別反応に対して大きな影響を及ぼしているといえる。このことから、祖父母の死に伴う死別反応を生じさせる要因に関しては、性格特性よりも故人の生前の機能、すなわち故人がその人にとってどういった存在であったかといったことの方が死別反応を理解・予測する上で重要な要因になると考えられる。したがって、死別以前に祖父母の機能を評価し、孫が祖父母に対して時間的展望促進機能や存在受容機能を過度に求めているかどうかを測定することは、死別後により強い死別反応を示す可能性のある孫に対して周囲の者が事前に注意を向けると同時に、祖父母を亡くした孫のこころに寄り添った理解と関わり合いを持つことを可能にするものと思われる。

なお、本研究では、死別反応尺度の下位因子ごとに関連する性格特性、故人の各機能の影響度が異なることが示唆された。したがって、死別反応に関連する要因に関しては、性格特性や故人の生前の機能といった一つの上位概念として捉えることができるものの、異なる次元の死別反応の生起性を検討する場合には、性格特性や故人の生前の機能といった上位概念についてより細分化した観点から捉えることが重要であるともいえる。

４．本研究における限界点と今後の展望

本研究では祖父母の死に焦点を当て、第１報では①祖父母の死に対する孫の認識、②祖父母の死に伴う死別反応について検討し、本稿では③死別反応の関連要因について検討を行った。その結果、本研究では、これまで論じられることの少なかった祖父母の死の様相について一定の知見を得ることができたものと思われる。しかしながら、本研究に関してはいくつかの限界点が存在する。まず、本研究は過去の死別体験について回想形式を用い回答を得ており、対象者の死別からの経過時間に関してもかなりの幅が存在した。したがって、本研究結果が記憶によるバイアスの影響を受けている可能性は否定できない。そこで、より信頼性の高い回答を得るためには、今後、記憶のバイアスを抑えた一定の死別経過期間内で祖父母と死別した孫を対象に研究を行う必要があると考えられる。次に、本研究では死別反応の関連要因として性格特性と故人の生前の機能を取り上げたものの、今回の研究が横断的研究であることから、性格特性や故人の生前の機能と死別反応との因果関係について明確に結論づけることはできない。したがって、性格特性と死別反応、故人の生前の機能と死別反応との関連については、今後、死

別以前からの調査を踏まえた縦断的研究デザインを用いて検証を行う必要があるといえる。

付　記

本論文は、筆者が2004年度卒業論文として、文教大学人間科学部に提出したものを修正・加筆したものである。本論文の作成にあたり、ご指導いただいた文教大学人間科学部 助教授 石原俊一先生に深謝いたします。

V　引用文献

Burnell, G.M. & Burnell, A.L. 1989 Clinical Management of Bereavement : A Handobook for Healthcare Professionals. New York : Human Sciences Press.

樋口和彦・平山正実 1985 生と死の教育:デス・エデュケーションのすすめ. 創元社.

池内裕美・中里直樹・藤原武弘 2001 大学生の対象喪失ー喪失感情、対処行動、性格特性の関連性の検討ー. 関西学院大学社会学部紀要, 90, 117-131.

Kahana, E. & kahana, B. 1971 College students' expectations of grandparent and grand-child role behaviors. *Gerontologist,* 30, 43－48.

Kinvick, H.Q. 1982 *Grandparenthood : An overview of meaning and mental health. The Gerontologist,* 22, 59-66.

小島操子 1988 遺族のケアー悲嘆反応への危機介入ー. 教育と医学, 36, 843-850.

松井豊・鈴木裕久・堀洋道・川上善郎 1995　日本における災害遺族の心理に関する研究の展望1. 聖心女子大学論叢, 85, 77-109.

岡村清子・河合千恵子 1987 高齢女性における配偶者喪失後の役割移行と適応. 老年社会科学, 9, 53-70.

小此木啓吾・深津千賀子・大野裕 1998 精神医学ハンドブック. 創元社.

Rogers, C.R. 1957 The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Jourunal of Consulting Psychology,* 21, 95-103.

Shaver.R. & Tancredy.M.C. 2001 Emotion, Attchiment, and Bereavement : A Conceptual Commentary In Stoebe, M.S. Hansson, R.O. Stroebe, W. & H.Schut (Eds.) Handbook of bereavement research : Consequences, coping and care (pp.63-88) Washingtto, DG : American Psychological Association.

田畑治・星野和美・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊 1996 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成. 心理学研究, 67(5), 375-381.

富田拓郎・大塚明子・伊藤拓・三輪雅子・村岡理子・片山弥生・川村有美子・北村俊則・上里一郎 2000a 死別体験後の悲嘆反応と対処行動. カウンセリング研究, 33, 48-56.

富田拓郎・大塚明子・伊藤拓・三輪雅子・村岡理子・片山弥生・川村有美子・北村俊則・上里一郎 2000b 幼い子どもを失った親の悲嘆反応と対処行動の測定. カウンセリング研究, 33, 168-180.

辻岡美延 2000 新性格検査法ーYG 性格検査・応用・研究手引ー. 日本心理テスト研究所

Worden, J.W. 2001 Grief Counseling and Grief Therapy : A Handbook for the Mental Health Practioner. 3nd ed. New York : Springer.